
日本子ども社会学会 学会ニュース

第 11 号 (2004/10/15)

日本子ども社会学会事務局

〒812-8581 福岡市東区箱崎 6-19-1 九州大学教育学部地域教育社会学研究室気付

TEL&FAX:092-642-3124(住田研究室) TEL&FAX:092-642-3125(大学院生研究室)

E-mail jscs-edu@mbox.nc.kyushu-u.ac.jp URL <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jscs2/>

目次

第 12 回大会開催校について 1	紀要編集委員会からのお知らせ 11
第 12 回大会開催校から 1	事務局からのお知らせ 11
第 11 回大会報告 2	新入会員, 住所・所属等変更, 退会者 13
第 11 回大会総会報告 8	

第 12 回大会開催校について

第 11 回大会の総会で承認された通り、第 12 回大会は大阪市立大学で行われることになりました。開催校の所在地、日程は下記の通りです。大会案内、大会事務局連絡先など、詳細は別途お知らせいたします。皆様のご参加、ご発表をお待ちしております。

開催校：大阪市立大学 (住吉キャンパス)

〒558 0021 大阪市住吉区杉本 3 3 138

日 程：2005 年 6 月 25 日(土)、26 日(日)

第 12 回大会開催校から

第 12 回大会準備委員長 山縣文治 (大阪市立大学)

日本子ども社会学会第 12 回大会を、大阪市立大学でお引き受けすることになりました。日程は、平成 17 年 6 月 25 日(土)、26 日(日)の両日、会場は大阪市立大学住吉キャンパスを予定しています。本学では、今秋、キャンパス内に新しい教育棟建設が進んでおり、来年の会場は、この新教育棟の使用を検討しています。会場使用が可能になりましたら、おそらく、快適な発表および討議環境となるものと信じています。

子ども社会を取り巻く環境は、都市部、過疎地を超えて、ますます厳しくなっています。このような状況の分析や、それへの対処は、少なくとも既存の単一科学では対応できないと考えられます。本学会の先達は、このような状況を見越してか、学際的な研究交流の場を社会的に確保して下さいました。そのような思いを大切にしつつ、子どもたちの豊かな明日に資することを願って、大会運営および企画を考えていきたいと思えます。

私の不徳の致すところで、本学には、残念ながら本学会会員が必ずしも多くいるわけではありません。しかしながら、できるだけ大阪らしく、まじめさと遊び心の両者を備えた「非まじめ」な気持ちを大切にしつつ準備に取り組んでいくつもりです。大会の運営に関しまして、ご意見、ご提案などございましたら、私ども事務局または学会事務局の方に遠慮なくお申し出下さい。

また、本学は、来年度より独立行政法人になることを予定しています。それにあわせて、会場使用や事務局体制などが、大きく変化する可能性が高くなっています。私どもにとっても未知の部分が多く、何かとご迷惑を掛けることも多いかと思えますが、ご容赦下さい。

多くの会員の方々のご出席およびご発表をこころよりお待ち申し上げます。

第 11 回大会報告

1. 公開シンポジウム

子どもは変わったか

司 会：武内 清（上智大学）
原田 彰（呉大学）
パネリスト：本田 和子（お茶の水女子大学）
小嶋 秀夫（京都学園大学）
深谷 昌志（東京成徳大学）
指定討論者：山本 清洋（鹿児島大学）

近年、子どもに対する大人のイメージが急速に変わりつつある。純粹や無垢、無邪気といった常識的な子ども観では捉えきれない、子どもの行動が噴出し続けているからである。しかし、これは子どもだけの变化なのか、大人の見方が変わったのか、子どもと大人の関係が変わったのか、社会が変わったのか。このようなテーマ設定の下、3人の先生にお話をいただいた。

深谷教授は、「子どもらしさを喪失した子どもたち - 電子メディア社会の中で育つ - 」というテーマで話された。深谷教授によると、「子どもが変わった」というときには、われわれの原型とする子ども観から子どもがどう変化したのかを捉える必要があるという。そのための方法として深谷教授は、時系列分析と共時的分析の2種類を示された。共時的分析では、韓国と日本の子どもの勉強時間などを比較した調査について提示された。それによると、ソウルに比べて東京の子どもは、楽しく毎日過ごしているということである。つまり、それぞれの国にはそれぞれの状況があり、それぞれの成長スタイルを捉えることが重要性だということである。時系列分析では、子どもとメディアの関係史という観点から、子どもの生活がどのように変化したかを示された。電子メディアの功罪として、間接体験の拡大と直接体験の矮小化、ネットワークの拡大と巣籠もり、伸びる自我と縮小する自我という点を取り上げられ、教育への影響について示された。その上で、近代的な子ども観の上で成立した学校という装置に代わる21世紀型の新たな成長保障装置の必要性を提示された。

小嶋教授からは、「『子どもは変わったか』という問いの意味」というテーマでお話をいただいた。まず、小嶋教授によると、「子どもだけが変わるとは思えない」とのことである。要するに、子どもの変化は成育環境の変化と結びついており、社会的条件が強く関与しているということである。しかし、「社会 子ども」という一方向的な関係にあるわけではなく、社会が子どもに合わせることも起こりうる。そして、このような相互作用的な関係は、専門的な概念や理論と現実生活との間にも生起している。特に、1920年代以降育児や教育の問題に心理学が大きな役割を果たすようになっており、「子どもは変わったか」という問いにも、心理学研究が社会的に果たした役割と責任を見失うべきではないことを提起された。その上で、民衆と専門家が共有する文化的なアイデア・技術・情報等の貯蔵庫としてのEPI (Ethnopsychological Pool of Ideas) 概念の重要性を提起された。

本田教授からは、今大会の一週間ほど前に長崎県佐世保市で起きた同級生殺害事件を手がかりに、この事件をめぐる社会（メディア）の動きとそれを受けとめる民衆の動きについてお話をいただいた。まず、メディアの動きとして、今回の事件に特徴的なことは、学校や家庭の責任論が浮上せず、「インターネット原因論」が浮上したこと、人間関係＝友人関係がキータームとなっていることの2点を取り上げられた。その上で、自身が80年代に行なわれた少女の交換日記に関する研究と比較して、インターネットで語られる言葉の特徴を指摘された。すなわち、インターネット上の言葉は観客を指定した演劇的な言葉であり、発せられた言葉に身体が追いかけることによって劇が完遂されるというのである。そして、言語の機能や位置づけという視点から、子どもの変化を捉える研究の必要性を提起された。

このようなパネリストからの指摘に対して、指定討論者及びフロアからは、次のような質問が出さ

れた。指定討論者の山本教授からは、3人のパネリストに対して、これからの大人 - 子ども関係の展望に関する質問が出された。フロアからは、「子どもが変わったというよりも、多様化しただけではないのか」といった質問や子どもの世界の自立性（自律性）をどう考えるのかといった質問が出され、活発なやりとりが展開された。「子どもが変わったか」というテーマは、もとより一回で完結した答えが出る類のものではない。しかし、このシンポジウムをきっかけに、少なくとも子どもに対する新たな見方が提起され、それを参加者間で共有できたように思われる。

（共栄学園短期大学 東野 充成）

2. ワークショップ

ワークショップ

子どもの放課後の現状を考える

- 学会試行調査のデータをもとに -

司 会	深谷 昌志（東京成徳大学）
話題提供	秦 政春（大阪大学）
	山縣 文治（大阪市立大学）
	須田 康之（北海道教育大学）
指定討論	住田 正樹（九州大学）

平成16年の冬、子ども社会学会の有志が、各地の学会員に協力を求め、放課後の子どもの実態を探る全国調査を実施した。北海道から沖縄までの16地点で、小学高学年生3226名の協力を得ることができた。調査結果の一部は、学会1日目（12日）に「放課後の子どもたち」の形で、高旗正人（中国短期大学）、深谷和子（東京成徳大学）、西本裕輝（琉球大）から発表された。

本ワークショップでは、前日の発表を踏まえ、主として、放課後の子どもの生活を、大都市、地方都市、山村とに分け、そうした地域差が子どもの生活にどう影響するかの論議を重ねた。

通塾回数が大都市2.9回、地方都市2.2回、山村1.9回。あるいは2時間以上勉強する子どもは大都市21.2%、地方都市9.7%、山村6.6%のような、地域差が認められた。

特に、秦氏が北九州市、山縣氏が大阪府、須田氏が北海道調査を担当したので、それぞれのデータを、担当地区に関連させて、コメントをつけた。あわせて、住田氏から子どもの放課後をどうとらえるかについての視点の提示があった。

また、本調査は、放課後の暮らしの変化を見るために、冬調査とほぼ同じ地域を対象として、秋調査（10月実施）の実施を予定している。そこで、秋調査に盛り込む調査項目の検討をおこなうと同時に、調査実施にあたっての具体的な手順などの話し合いを重ねた。そして、次年度の学会で、調査結果を報告することを確認して会を閉じた。

（東京成徳大学 深谷昌志）

3. ラウンドテーブル

ラウンドテーブル1

文芸のなかの子どもをどうとらえるか？

コーディネーター	原田彰（呉大学）
話題提供者	山田浩之（広島大学）
	白松賢（愛媛大学）
	中田周作（広島国際大学）

小説、映画、テレビドラマ、マンガなど多様な「文芸」に描かれた「子ども」をいかに研究対象とするのか、という原田彰氏の問いかけに応じて、このラウンドテーブルは開かれた。それに答える形で以下のように3名の話題提供者が報告を行った。

山田の報告は「マンガと子どもの関係 第二の 子供の誕生をめぐって」というテーマであった。まず1950年代から1970年代にかけてのマンガ言説に表れた子ども像が、明治から大正期の言説と重なり合っていたことを指摘した。その後、1980年代以後のマンガの内容分析によって1990年代以後、子ども像が再び変化していることを主張した。

白松賢氏のテーマは「少年マンガにおける『子ども』表現 マンガ・アニメ・RPGのキャラクター分析」であった。氏はマンガなどに描かれた会話や図像を分析することで、1950年代から60年代のマンガでは「少年」と「青年」が未分化であったことを検討した。また「子ども」とされる図像の分析によりマンガやビデオゲームにおける「子ども」の категорияが曖昧に用いられていることを明らかにした。

最後に中田周作氏は「『描かれた』子ども 子ども観研究の方法として」というテーマで報告した。氏がこれまで蓄積してきた小説や児童文学の分析結果を踏まえ、子ども観研究の方法が詳細に紹介された。その上で氏の分析方法のメリットとともに問題点や課題が提示された。

以上のような報告を受け、文芸を対象とした子ども社会研究の可能性について活発な議論が行われた。議論のための十分な時間が無かったことは残念であるが、この領域における研究の可能性を大いに期待させるものであった。

(広島大学 山田浩之)

ラウンドテーブル2

教育 / 保育場面における子どもの活動の解釈可能性と選択的解釈

コーディネーター	本山方子(奈良女子大学) 掘越紀香(大分大学)
話題提供	掘越紀香(大分大学) 市川洋子(お茶の水女子大学大学院) 砂上史子(弘前大学)
指定討論	村瀬公胤(信州大学)

本ラウンドテーブルは、幼稚園や学校における子どもの活動の解釈は、いくつかの可能性ある解釈からいかになぜ選択されているのかについて、事例をめぐって議論を行うもので、20名程度の参加者を得て開催された。まず、調査者自身による事例提示として、掘越氏が年長児の水遊び場面を、市川氏が小学5年生の小集団での発表場面をビデオ映像により行い、それぞれ調査記録と解釈を開示した。次に、非調査者の砂上氏はビデオ映像のみから先の2事例の記録作成と解釈を行った。さらに、指定討論者の村瀬氏は、話題提供者の解釈に対してメタ解釈を行い、調査者と非調査者間の解釈の違いを次のように指摘した。幼稚園の水遊び事例に対し、掘越氏はそこで起きているいざこざ展開の文脈にそって、行為者の意図を付与するスタイルで解釈しており、保育現場における当事者相互の関わりが基底におかれていた。一方、砂上氏は、氏が関心をもつ同型的行為を文脈とし、行為間の接続と構造に着目して解釈していた。また、児童の発表場面について、市川氏は縮約されたプロトコルに基づき、教師がある子どもを気にする理由を探ろうとする文脈で解釈しているのに対し、砂上氏は映像事例にほころびや裂け目を見出せず判断を保留しており、試みとしてあえて逸脱の文脈から解釈を試みたものの、解釈者の困惑を招いていることが指摘された。この後、フロアからの質問により活発な討論が行われた。その中で、参加者もまた解釈者としてこのラウンドに臨んでおり、解釈の手がかりとして時に教師のねらいや授業観を必要とすることが示された。また、砂上氏の言うほころびや裂け目とは何かとの質問に、何かうまく行っていないとか、授業のめざすものとずれているなど、解釈に向かわ

せる手がかりであると示された。全体としては、解釈行為には暗黙的に何のために解釈を行うのかという目的が潜在することなどが強調された。なお、時間超過にも係わらず、全参加者に最後までおつきあいいただいたことを感謝したい。

(奈良女子大学 本山方子)

ラウンドテーブル3

現代社会のなかのジェンダーイシュー

- ジェンダー・フリー教育を巡って起きている論争の背景にあるもの -

コーディネーター	近藤 弘 (立教大学) 望月重信 (明治学院大学) 岸澤初美 (川崎市立看護短期大学非常勤) 春日清孝 (明治学院大学非常勤)
話題提供者	望月重信 (明治学院大学) 岸澤初美 (川崎市立看護短期大学非常勤) 春日清孝 (明治学院大学非常勤)

まず、望月重信氏より、今回のテーマに関する趣旨説明が行われた。氏は現在起きているジェンダー・フリー教育を巡るバックラッシュ・バッシングの背景について述べ、ジェンダー研究と子ども社会研究の今後の課題および学校現場でどのようなことが起きているのかを参加者と議論したいと話された。続いて岸澤初美氏より、学校現場ではどうなっているのかを各種資料および現場教師からの聞き取りにもとづいて話された。学校現場では管理が厳しくなっており、沈滞している状況が報告された。また、春日清孝氏はインターネット上でジェンダーフリー教育に関してどのような情報が飛び交っているかについて報告された。ジェンダーフリーとは性差をなくすことであるといった定義が先立ち、きちんとジェンダーフリーがとらえられていない現状があることが特徴として指摘された。

こうした報告を受けて、自由な議論に移った。国立女性教育会館の集会でジェンダーフリー教育という言葉を使わずにジェンダーに敏感な教育という言葉に統一してほしいという要求をされた。ジェンダーフリー教育という言葉は議会で指摘されたことを受けて、そのような要求となったとの報告があった。また、男女の会話分析から男性優位という現象が1970年代から80年代にかけて明らかにされた。そうした分析は男性支配アプローチではないかということで、社会言語学?カルチュラルアプローチへと移っていった。そうした経緯をふまえてジェンダー形成の文化的メカニズムの解明が必要ではないかという指摘もあった。また、何のために男、女といったジェンダーを確定する必要があるのかよく分からないという意見も出された。

必ずしも参加者は多くなかったが、中身の濃い議論が展開されたと思われた。

(立教大学 近藤弘)

ラウンドテーブル4

教育紙芝居と街頭紙芝居

コーディネーター 堀田 穰 (京都学園大学)

日本子ども社会学会第十一回大会(福岡、九州大学)ラウンドテーブル「教育紙芝居と街頭紙芝居」のコーディネータを務めました。福岡では福岡県立図書館に浮羽町双葉幼稚園旧蔵の教育紙芝居コレクションがあります。これは戦前の高橋五山による全甲社出版のものがまとまっており、貴重なものといえます。ところが、図書館のウェブサイトにはコレクションの目録、利用法などが公開されてい

ないことが、その価値についての認識が低いのではないかという危惧がありました。そして飯塚市歴史資料館にはかつての炭鉱住宅街で愛された絵元、吉住信勇氏寄贈の街頭紙芝居コレクションがあります。

関係者のご高配で福岡県立図書館から司書の森桂子氏、飯塚市歴史資料館から学芸員の嶋田光一氏のご出席を得ることが出来、感謝に耐えません。紙芝居コレクション所蔵機関の担当者の交流は、岡山、つくばに続くこのラウンドテーブルの所期の目的の一つです。残念ながら参加人数は多くありませんでしたが、集まっていたいただいた方々は継続的に紙芝居に関心を抱いておられる学会員のみならずばかりであり、心強いものでした。

県立図書館の姿勢についても危惧を司書の方に直接伝えることが出来、また、近隣の福岡と飯塚のそれぞれ教育紙芝居と街頭紙芝居のコレクション担当者の交流が実現しました。またつくばのような盛り上がりこそありませんでしたが、時間余的な裕があり、お持ちいただいた街頭紙芝居を直接手に取ることができたり、さまざまな情報や問題意識を披露し、意見交換できたことは、学会が紙芝居研究に一定の役割を果たす基礎になります。

また、研究者も、児童文化財として紙芝居を捉えるだけでなく、子どもの現場としての視点を語り始めており、逆にそれゆえに基礎的な情報や、基盤の整備をも呼びかけていかなければならないことにも理解が進んだようです。

(京都学園大学 堀田穰)

4. 第11回大会を終えて

第11回大会実行委員会委員長 住田正樹(九州大学)

日本子ども社会学会第11回大会は平成16年6月12・13日の両日にわたって九州大学箱崎文科系キャンパスにおいて開催され、まずまず盛会のうちに終えることができました。会員の皆さまにはいろいろとご協力いただきましてありがとうございました。

今大会の分科会発表件数は44件、ワークショップは1件、ラウンドテーブルは2件、そして大会参加者数は188人、懇親会参加者は82人でした。発表件数も参加者数も例年より幾分少なめでしたけれども、懇親会参加率はこの数年で最も高く44%でした(懇親会参加者/大会参加者とすれば)。

この数年、大会期日は6月の第4週の土曜日・日曜日になっておりましたが、2週間繰り上げたのは、もともと学会発足時には6月第2週の土曜日・日曜日を予定していたということもあります。それ以上に、6月下旬ですと冷房を入れなければならない、そうすると会場費に加えて冷房費も支払わなければならないだろうという、もっぱら経済的理由によるものでした。しかし冷房を使わなかったのはよかったです。今年から独立行政法人になったためか会場費が予想以上に高く驚きました。初めは余裕を持って借りていた教室もすぐに取り消しました。この予想以上の会場費の分は結局、学生諸君に本学会の今日的な有意義性を強く訴えて、そしてまた大会参加活動の楽しさ、学生時代の何でも体験チャレンジの有用性を強調した上で、アルバイト料を通常の半分に削って賄いました。蹴寄せが常に弱いところに及ぶのは世の常ですが、学生諸君には大いに感謝する次第です。

今大会の公開シンポジウムは「子どもは変わったか」というテーマで、時宜を得た問題ではないかと思っておりましたので、もう少し会員の方々のご出席をお願いしたいところでした。しかし限られた時間のなかであるにもかかわらず、充実した報告と活発な質疑応答が行われ、実に有意義なシンポジウムだったと思っています。ご報告いただいた先生方、討論・司会の先生方には改めて御礼申し上げます。

そして今日の子もたちの置かれている状況と子どもたちを巡るさまざまな問題を考えるとき、本学会の有意義性と重要性を改めて強く意識する次第です。

5. プログラム訂正

[研究発表 - 2部会]

- ・角谷詩織・無藤隆 「子どもの悩みごとの対処の仕方と心理的問題 - 東京都親子関係調査より - 」
(訂正後) 「思春期の子どもの社会心理的問題性と親子関係：悩みを相談できる相手」
- ・田村毅他 「周産期の夫婦関係と子育て(第四報)」
(訂正後) 「妊娠・乳幼児期の夫婦関係と子育て(第四報)」

[研究発表 - 3部会]

- ・ベミンギョン 「韓国の子どもの歌の成立と童謡のかかわり - 戦前の韓国の幼稚園で使われていた楽譜集を中心にして - 」
(訂正後) 「韓国における子どもの歌の成立と童謡のかかわり - 戦前の韓国(朝鮮)で使われていた楽譜集を中心にして - 」
- ・鈴木常勝 「『学校文化』からの自由 - 街頭紙芝居の再計画 - 」
(訂正後) 「もうひとつの『子どもの居場所』 - 街頭紙芝居の再評価 - 」
- ・岩田遵子 「『児童文化』成立のメルクマールは何か - 大正期童謡運動を対象にして - 」
(訂正後) 「大正期の童話・童謡運動を『児童文化』の成立ととらえることは可能か」
- ・鶴野祐介 「非 - 母親 子守唄の社会的背景」
(訂正後) 「非 - 母親 子守唄の社会的背景 - 「守り子唄」の伝承者論を中心に - 」

[研究発表 - 2部会]

- ・高旗正人他 「放課後の子どもたち - 北海道から沖縄までの16地点での子どもたちの暮らし - 」
(訂正後) 「放課後の子どもたち - 北海道から沖縄までの16地点での子どもたちの放課後の暮らし - 」

[研究発表 - 4部会]

- ・村瀬ひろみ 「子ども向けアニメーションにおけるジェンダー」
(訂正後) 「子ども向けアニメーションにおけるジェンダー関係」

[研究発表 - 1部会]

- ・三井真紀 「多文化保育に関する大学生の意識改革の研究」
(訂正後) 「多文化保育に関する大学生の意識改革の研究 - 多文化保育的視座における男女共学への一考察 - 」

[研究発表 - 3部会]

- ・元森絵里子 「投稿欄に見る現代の子ども社会」
(訂正後) 「投書欄にみる現代の「子ども期」」

[研究発表 - 4部会]

- ・周建中 「帰国者および外国人子女の適応と日本語教育問題について」
(訂正後) 「帰国者および外国人子女の適応と日本語教育問題について - いくつかの事例から - 」
-

第11回大会総会報告

1. 報告事項

(1) 2003年度事業報告

第10回大会の開催	2003年6月28日(土)~29日(日)	於:筑波大学
理事会の開催(平成14年度)	2003年6月27日(金)	於:筑波大学 人間系学系等
理事会の開催(平成15年度)	(第1回)2003年6月28日(土)	於:筑波大学 第二学群講義棟
	(第2回)2003年10月4日(土)	於:龍谷大学 深草校舎
	(第3回)2003年12月6日(土)	於:龍谷大学 大宮学舎
	(第4回)2004年3月28日(日)	於:キャンパスプラザ京都
	(第5回)2004年6月11日(金)	於:福岡リーセントホテル
評議会の開催	2003年6月28日(土)	於:筑波大学 第二学群講義棟
各種委員会の開催	2003年6月28日(土)	於:筑波大学 第二学群講義棟
紀要編集委員会の開催	2003年10月4日(土)	於:龍谷大学 深草校舎
	2003年12月6日(土)	於:龍谷大学 大宮学舎
	2004年3月28日(日)	於:キャンパスプラザ京都
研究交流会(中四国地区)の開催	2004年3月6日(土)	於:広島大学教育学部
事務局活動	2003年6月4日(水)	第10回大会プログラム送付
	2003年7月8日(火)	『子ども社会研究』9号送付
	2003年10月21日(火)	学会ニュース10号発行
	2004年2月4日(水)	第11回大会案内送付
	2004年5月28日(月)	第11回大会プログラム送付
会員数(2004年6月1日現在)	正会員	510名
	学生会員	74名
	賛助会員	2名
	全会員数	586名
2003年度学会費納入状況(2004年6月1日現在)	正会員	510名中 389名(76.3%)
	学生会員	74名中 68名(91.9%)
	賛助会員	2名中 0団体(0.0%)
	全会員数	586名中 457名(78.0%)

(2) 紀要編集委員会報告

(3) 研究交流委員会報告

(4) メディア活用委員会報告

(5) 将来構想委員会報告

(6) 研究刊行委員会報告

(7) 学会奨励賞選考委員会報告

(8) その他

2. 審議事項

(1) 2003年度決算について(9頁参照)

(2) 2003年度会計監査について(9頁参照)

(3) 学会の研究活動について

(4) 2004年度予算案について(10頁参照)

(5) 第12回大会開催校および開催日について

(6) その他

日本子ども社会学会 2003年度(2003.4.1～2004.3.31) 一般会計予算

< 収入の部 >

項目	収入	(内訳)
学会費(2003年度)*	3,156,000	
正会員 7,000×412名		2,884,000
学生会員 4,000×63名		252,000
賛助会員 10,000×2団体		20,000
大会プログラム広告掲載料(14)	260,000	
抜き刷り代	60,000	
紀要売上 2,000×100冊	200,000	
紀要編集委員会事務費残金	58,091	
前年度繰越金	4,071,269	
一般会計収入合計	7,805,360	

< 支出の部 >

項目	支出	(内訳)
紀要刊行費(第9号)	1,100,000	
印刷費	502,200	
第10回大会プログラム印刷費		200,000
第11回大会案内・発表申込ハガキ印刷費		50,000
学会ニュース第10号印刷費		50,000
封筒印刷費		200,000
振り込み用紙印字代		2,200
通信費	500,000	
第10回大会プログラム発送費		100,000
第11回大会案内・発表申込ハガキ発送費		80,000
学会ニュース第10号発送費		80,000
紀要第9号発送費(含 図書館への発送)		70,000
理事会・各種委員会 会員通信費		170,000
事務用品費	90,000	
事務局員交通費(2人×2回)	150,000	
紀要編集事務費	150,000	
会議費(理事会など)	250,000	
学会奨励賞費(楯、賞状)	50,000	
第10回大会補助	200,000	
第10回大会シンポジウム謝金	50,000	
第11回大会への補助	200,000	
事務局費	100,000	
予備費	4,463,160	
一般会計支出合計	7,805,360	

学会費は、会員数の80%見込みで計算。但し、2003年度分学会費を前年度までに納入している会員を除く。既に2003年度の学会費を納入している会員数 正会員25人 学生会員1人

日本子ども社会学会 2003年度(2003.4.1～2004.3.31) 決算

< 収入の部 >

項目	収入	(内訳)
学会費(2003年度)	2,737,000	
正会員 7,000×355名		2,461,000
学生会員 4,000×67名		276,000
学会費(2004,2005年度)	1,036,000	
正会員 7,000×131名		911,000
学生会員 4,000×33名		125,000
学会費(過年度)	343,000	
正会員 7,000×49名		331,000
学生会員 4,000×3名		12,000
大会プログラム広告掲載料(13)	248,000	
1頁(表紙) 24,000×2社		48,000
1頁 20,000×7社		140,000
半頁 15,000×4社		60,000
抜き刷り代	58,800	
紀要売上 2,000×112冊	224,000	
紀要編集委員会事務費残金	58,091	
前年度繰越金	4,071,269	
紀要送料	10,140	
学術著作権協会	36,606	
出版者著作権協議会	37,000	
通帳利子	39	
その他	7,000	
一般会計収入合計	8,866,945	

< 支出の部 >

項目	支出	(内訳)
紀要刊行費(第9号)	974,400	
印刷費	347,400	
第10回大会プログラム印刷費		147,000
第11回大会案内・申込ハガキ印刷費		46,700
学会ニュース10号印刷費		46,000
封筒印刷費		105,000
振り込み用紙印字代		2,700
通信費	413,875	
第10回大会プログラム発送費		124,480
第11回大会案内・申込ハガキ発送費		68,280
学会ニュース10号発送費		67,680
紀要第9号発送費(含 図書館への発送)		14,035
理事会・各種委員会 会員通信費		139,400
事務用品費	60,183	
事務局員交通費(2人×3回)	159,600	
紀要編集事務費	150,000	
会議費(理事会など)	137,617	
第10回大会補助	200,000	
第10回大会シンポジウム謝金	50,000	
第11回大会補助	200,000	
事務局費	100,000	
その他	3,000	
一般会計支出合計	2,796,075	

監査の結果、適正に執行されていることを確認いたしました。

監査 住岡 英毅

監査 村上 尚三郎

日本子ども社会学会 2004年度(2004.4.1～2005.3.31) 一般会計予算

<収入の部>

項目	収入	(内訳)
学会費(2004年度)	2,098,000	
正会員 7,000 × 282名		1,974,000
学生会員 4,000 × 26名		104,000
賛助会員 10,000 × 2団体		20,000
大会プログラム広告掲載料	200,000	
抜き刷り代	35,000	
紀要売上 2,000 × 100冊	200,000	
事務局費残金	2,769	
前年度繰越金	6,070,870	
一般会計収入合計	8,606,639	

<支出の部>

項目	支出	(内訳)
紀要刊行費(第10号)	1,200,000	
印刷費	623,200	
第11回大会プログラム印刷費		150,000
第12回大会案内・申込ハガキ印刷費		50,000
学会ニュース11号印刷費		50,000
名簿印刷費		150,000
選挙関係印刷費(含:選挙用封筒印刷費)		70,000
封筒印刷費		150,000
振り込み用紙印字代		3,200
通信費	705,000	
第11回大会プログラム発送費		150,000
第12回大会案内・申込ハガキ発送費		75,000
学会ニュース11号発送費		75,000
会員カード発送費		50,000
名簿発送費		85,000
紀要第10号発送費(含:図書館への発送)		70,000
理事会・各種委員会 会員通信費		200,000
事務用品費	80,000	
事務局員交通費(2人×5回)	266,000	
紀要編集事務費	150,000	
会議費(理事会など)	200,000	
選挙関係担当委員交通費(2回)	240,000	
学会奨励賞(楯、賞状)	50,000	
第11回大会シンポジウム謝金	50,000	
第12回大会補助	300,000	
事務局費	100,000	
研究活動費	550,000	
予備費	4,092,439	
一般会計支出合計	8,606,639	

学会費は、会員数の80%見込みで計算。但し、2004年度分会費を前年度までに納入している会員を除く。既に2004年度の学会費を納入している会員数は、正会員126名、学生会員33名。

紀要編集委員会からのお知らせ

第10号記念号を刊行しましたが、会員皆さまのお手元に届くのが遅れましてお詫び申し上げます。大会に間に合わせるために無理をしましたことが原因です。また、掲載論文の採択数が少なかったことを反省しまして、査読内規の見直しを図っております。現在、11号の編集に向けて作業に入っていますが、今回も投稿数が20本を超える見込みです。専門分野からみて編集委員のみでは査読しきれない論文について、会員に査読をお願いする必要があるかと思いますが、その折はご協力をお願い申し上げます。また、今後、特集の組み方についても検討していくことに致します。ご意見やアイデアがありましたら、田中のメール宛(totanaka@human.tsukuba.ac.jp)によりしくお願い申し上げます。

なお、10号末尾の編集委員名に誤りがありました。次のように訂正をお願い致します。

井戸正美 井門正美

(筑波大学 田中統治)

事務局からのお知らせ

(1) 学会費納入

本年度(平成16年度)の学会費未納の方は、郵便振替にてお納めください。学会費を滞納されますと会員資格が失われます。口座番号等は次のとおりです。なお、通信欄には必ず何年度の学会費かをご記入ください。

口座番号 01760-1-85048
加入者名 日本子ども社会学会

(2) 会費

平成13年度より会費が値上げされています。学会費振込みの際はご注意ください。

平成12年度以前 正会員5,000円、学生会員3,000円、団体会員10,000円
平成13年度以降 正会員7,000円、学生会員4,000円、団体会員10,000円

(3) 学会入会手続き

本学会へ入会を希望される方は、学会事務局(住所は1頁参照)まで、切手を添付した返信用封筒を同封の上、ご連絡ください。事務局より入会案内書をお送りいたします。入会される場合、入会申込書に必要事項を記入の上(現学会員の推薦が必要)会費を郵便振替にて納入してください。

(4) 住所・所属等の変更

住所、所属、電話番号等に変更があった場合、必ず学会事務局へお知らせください。これらの変更は『学会ニュース』にてお知らせいたします。また、退会される方も、必ず学会事務局へお知らせください。いずれの場合も、電話ではなく葉書やFAX、E-mail等の書面にてお願いします。

(5) 献本

天沼英雄 『社会的教育論』理想書林、2004

天沼英雄 『子ども学試論 - 発達と社会』理想書林、2003

田中理絵 『家族崩壊と子どものスティグマ - 家族崩壊後の子どもの社会化研究』
九州大学出版会、2004

かがみりょう・青木沙織・萩原礼子 『手づくり遊び場デザインブック』まちワーク研究会、2003

須田康之 『グリム童話 受容 の社会学 - 翻訳者の意識と読者の読み - 』東洋館出版社、2003

黄順姫編著 『W杯サッカーの熱狂と遺産 - 2002年日韓ワールドカップを巡って』世界思想社、2003

青少年交友協会 野外文化研究所 『第7回野外伝承遊び国際会議報告書 - 野外伝承遊びの意義と現
状 - 』青少年交友協会、2004

湯地宏樹 『幼児のコンピューターゲーム遊びの潜在的な教育機能 - メディア・リテラシー形成の観点
から - 』北大路書房、2004

(6) 財団法人日本科学協会より、研究助成募集の案内が届きました。ホームページをご参照の上
(<http://www.jss.or.jp>) ふるってご応募ください。

平成17年度笹川科学研究助成 募集期間：2004年9月1日～10月15日

問い合わせ先 財団法人日本科学協会 笹川科学研究助成係

〒107-0052 東京都港区赤坂1-2-2 日本財団ビル5F

TEL 03-6229-5365 FAX 03-6229-5369

E-mail jss@silver.ocn.ne.jp URL <http://www.jss.or.jp>

(7) 社団法人青少年交友協会より、国際会議の案内が届きました。ふるってご参加ください。

第8回野外伝承遊び国際会議

期間 平成16年10月30日(土)～11月1日(月)

会場 国立オリンピック記念青少年総合センター

問い合わせ先 社団法人青少年交友協会

〒102-0083 東京都千代田区麹町4-5 第7麹町ビル56

TEL 03-3262-7471 FAX 03-3262-7472

E-mail kouyuu@din.or.jp

- 事務局から -

事務局では『大会プログラム』に掲載する広告を募集しています。広告掲載を希望する出版社等をご存知でしたら、ご紹介ください。

日本子ども社会学会 事務局

〒812-8581

福岡市東区箱崎6-19-1

九州大学教育学部

地域教育社会学研究室 気付

Tel&Fax 092-642-3124 (住田研究室)

Tel&Fax 092-642-3125 (院生研究室)

新入会員

(略)

退会者

(略)

住所・所属等変更

(略)
